

小樽の歴史

小樽市には、縄文時代以来の豊かな自然と歴史文化が生み出し育んださまざまな文化遺産があります。

それぞれの文化遺産が誕生した背景を知ると、より理解が深まります。小樽市の歴史をおさらいしてみましょう。

※ BC：紀元前、AD：紀元後

縄文時代（BC13000年頃～BC200年頃）

《小樽に集落ができはじめる》

現在、市内最古の集落跡はおおよそ8,000年前（縄文時代早期）の「塩谷3遺跡」である。また、市内で確認されている8割が縄文後期の遺跡だが、代表的なものとして「忍路環状列石」（P21）、「地鎮山環状列石」（P22）などのストーンサークルが挙げられる。

続縄文時代（BC200年頃～AD600年頃）

《北方との交流が盛んになる》

水稲耕作を行わなかった北海道では、「弥生時代」ではなく「続縄文時代」と呼ばれる時代に移る。この時期の遺跡からはサハリン製耳飾りが出土するなど、北方との交流が盛んであったと考えられる。「手宮洞窟」（P20）に陰刻画が刻まれたのも、この時代である。

擦文時代（600年頃～1200年頃）

～中世アイヌ期（1200年頃から1600年頃）

《「交易の文化」の成立を伝える遺跡も》

本州では奈良～室町時代にあたる時代。市内の寺院にはこの時期に近畿地方で作成された「木造聖観音立像」（P14）が伝えられている。北海道ではアイヌ文化の輪郭がはっきりしてくる時期で、本州や北方地域との交易がさかに行われていた。遺跡数は少ないものの、本州からもたらされた鉄製品なども発見されている。



東西蝦夷山川地理取調図（部分）/ 安政6（1859）年

近世（1600年頃から1868年）

《ニシンの千石場所として有名に》

小樽周辺への和人（本州以南にルーツを持つ日本語を母語とする人々）の進出は、18世紀後半からニシン漁を主な目的として、本格的に始まる。漁の主力は初期はアイヌの人々であったが、後期は道南からの出稼ぎ漁民たちも加わった。本州以南で肥料としてニシンメ粕の大規模利用が開始されると、ニシン漁は次第に大きな産業となった。積丹半島以東でも和人の越年が許可され、1865年に小樽は箱館奉行所の出先の「村並」となった。この頃、「松前神楽」（P12）が小樽周辺に伝えられた。

明治時代（1868年～1912年）

《港湾も鉄道も整備 物流の拠点に発展》

明治政府は札幌を北海道の拠点とすべく、物資の供給基地として小樽港の整備に着手。港から運ばれてくる物資を保存しておくため、海沿いに木骨石造倉庫が次々と建てられた。明治13（1880）年には北海道初の鉄道である「官営幌内鉄道」（15年に全面開通）も敷設され、日本の近代化を支えたエネルギー・石炭の搬出港となる。「旧手宮鉄道施設」（P06）はこの時期から建設が始まった。一方、ニシン漁も最盛期を迎え、東北地方から出稼ぎ漁夫が多数来樽した。また全国各地からの移住者も詰め掛け、まちはそれぞれの地域の文化・風習のつぼと化す。「木造五百羅漢像」（P13）「忍路鯨漁撈の行事」（P09）「高島越後盆踊りの行事」（P16）「向井流水法」（P15）はこの時期に伝承・成立した。明治後期には港湾の発展は隆盛を極め、全国屈指の経済都市、港湾都市として急成長を遂げ、その盛況にふさわしい当時代を代表する国内有数の建築家が、小樽に作品を残していく。「旧日本郵船株式会社小樽支店」（P19）や「日本銀行旧小樽支店」（P17）はその代表である。

大正時代（1912年～1926年）

《北日本随一の経済都市として大繁栄！》

明治の好況は大正時代も継続した。その盛況ぶりは現在歴史的建造物として数多く残る銀行群からしのぶことができる。この時代、大型船と倉庫の間で荷物の受け渡しをする「はしけ荷役」作業の効率化のため海岸を埋め立てた結果「小樽運河」も誕生。大正9年の第1回国勢調査では全国13位の人口規模を誇った。人口増加と商業の担い手育成のため、地元実業家が私財を投入して高等商業学校（現小樽商科大学：創立は明治末）を誘致するなど、文化都市としても成熟を増す。

昭和戦前期（1926年～1945年）

《恐慌も乗り越えた小樽の最後の隆盛》

日中戦争直前（昭和10年前後）までは好景気が続き、昭和恐慌も、食糧・原材料の供給基地としての北海道・樺太を経済圏に持つ小樽の経済界ではさほど大きな影響を受けず、銀行建築も2代目の建物に建て替えられた。「旧三井銀行小樽支店」(P18)は最新の技術を取り入れた好例である。郊外での開発もはじまり、東小樽地区（昭和13年に合併）での都市開発では欧州の「田園都市」をモデルに計画が立てられ、オタモイ海岸には戦前の好景気を代表するように断崖上にオタモイ遊園地が作られた。他都市のような大規模な空爆被害を受けなかったことは、市内の歴史的建造物が残る大きな要因となった。

昭和戦後期（1945年～1989年）

《「斜陽」を経て観光都市へと転換》

終戦後復興の拠点港として戦前の繁栄を取り戻したかに見えた小樽であったが、昭和30年代に入ると、エネルギー政策の転換による石炭の需要低下や港湾貨物の情勢変化により港勢は失速した。昭和30年代後半になると市街地に本店・支店を構えていた銀行、商社、貿易関係会社の撤退が相次ぐ。主要産業を失った小樽は「斜陽のまち」と化した。

そんな中、本来の役目を失った小樽運河の埋め立てをめぐる「運河保存運動」が発生。古い物に新しい価値を与えた市民主体のまちづくり運動となった。現在小樽運河は観光都市小樽のシンボルとなっている。

平成・令和時代（1989年～現在）

《歴史文化を活かしたまちづくりへ》

